琉游舎

アトリエ琉游舎だより 239号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
琉游舎for healing https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3

2026年9月9日日発行

白露もこぼさぬ萩のうねりかな

芭蕉

●24節気の「白露」は今年は9月7日から22日です。夜中に大気が冷え草花や木に朝露が宿りはじめる頃。露は光り、白い粒のように見えます。日中の暑さも和らぎはじめ、徐々に秋の気配が深まっていきます。それでももう秋とは言い難く、秋分までは暑い日もあるようです。

●江戸時代に出版された暦の解説図書『暦便覧』に、「陰気ようやく重なりて露こごりて白色となれば也」という記述があるようです。現代語で意味を補えば、「陰気（寒さや涼しさ）が増えて陽気（暑さ）を上回り、水蒸気が結露して露になり、白く輝く」といったところです。夏から秋へ季節が徐々に移って行く様子がよく表わされているように思います。

●芭蕉の句も夏の厳しい気候から秋の優しい気候へと変わった実感が表れているように思えます。「白い露をこぼしもせず、萩がやわらかく大きく揺れているなあ」との感慨がこぼれ落ちるようです。「うねり」という言葉で、萩が風に合わせて揺れる様子が出ています。萩の枝や葉は細くしなやかですが、その上の露は落ちずに保たれています。そこに、秋の風のやさしさと萩の気品のある動きが描かれているのでしょう。情景が目に浮かびます。

●近年、春や秋が短くなった、あるいは季節の移り変わりの波が大きく、行ったり来たりの、大波が押し寄せるような変化だという感想が聞かれます。白露もこぼさないような優しい萩のうねりのように、穏やかでゆったりした季節の変化はもう望めないものなのでしょうか。

●季節だけでなく、社会変化も大波が押し寄せるような激しさ。そればかりか地震や大雨・水害の激甚化と、穏やかな日本はどこに行ってしまったのでしょう。東日本大震災を天罰と言って非難された政治家がいましたが、私たちを取り巻く人為環境や自然環境が、めまぐるしく変化して、心の安まる時がないのであれば、人はこの現状に天罰が下る者を特定したいと思いたくもなるのでしょう。となると天罰が下される人は誰でしょう。庶民はたいがい時の為政者だと思いたいでしょうが、またそうならないのも時の常なのかもしれません。

秋の彼岸会法要　9月23日（水）10時半

狂言綺語…琉游舎

8月末に、長良川の鵜飼を体験するツアーに参加するため、涼しい北関東から猛暑の西日本に出かけました。数日前から北陸地方に現われた線状降水帯で水害が起きていたので、山を挟んだ南側の長良川源流にも影響が及び、鵜飼が実施されるかどうかを心配しながらの出発です。郡上八幡に行くためのツアーバスに乗り換えた豊橋駅では、夏の日差しが厳しく、北関東から来た私には身に堪える暑さです。ところが長良川源流のある郡上八幡市では、昨晩から警報級の雨が降り、結局「本日の鵜飼は中止となりました」とのお知らせを、スマホで見ることになってしまいました。２泊３日の旅の一番の目的が、その初っ端から頓挫です。

それでも、長良川のほとりにある鵜飼ミュージアムで、鵜飼の仕組みを学ぶことができました。鵜匠は宮内庁の職員であること、川鵜ではなく海鵜でその捕獲は茨城の海岸絶壁で捕獲した鵜であること、船の構造や鵜飼の仕方、かがり火の役割など、初めて知ることだらけです。その後中止の代わりに、ホテルの広間で、鵜匠の方が鵜とともにやってきて、鮎の捕獲、はき出すところや飲み込みの実演を目の前で披露してくれました。勿論それだけでなく、鵜飼の歴史も丁寧に説明してくださり、とても理解が深まりました。そして最後に披露してくれた芭蕉の句が、この鵜飼の本質を鋭く示して、とても貴重な経験となったのです。夜の船に乗り、鵜飼の実演を見物するだけでは観えなかったかもしれない、鵜と鵜匠と見物人、その共棲、人が自然の中で生きていくこと、様々な思いが現われた貴重な体験となりました。その芭蕉の句は「おもしろてやがて哀しき鵜船かな」です。かがり火の中に繰り広げられる鵜捕りの技を楽しんだものの、宴が終わり暗闇が戻ると、鵜たちの運命や生業の儚さ、人間の切なさがこみ上げてくる様子が句にしたためられています。

旅はその場に行かなければ分らない景色や空気感、人、言葉、食べ物などの風土を実感できる貴重な体験です。風土に接すれば、それがそこに存在する意義が、自然と感得されるものです。長良川の川端に立って初めて人がなぜ、ここで鵜を使い鮎を捕り、生業を立てているのかを感ずることができます。知識は映像や書物で得ることはできたとしても、その風土を体感でもしないと、知識だけではそれを知っているということ以上のものを与えることはないでしょう。体感することは、瞬間であろうとも、その風土と一体となって、その風土に共鳴することなのではないでしょうか、旅の意義はそこにあると、今回あらためて知りました。

旅で必ず立ち寄る場所に神社仏閣があります。私は僧侶にもかかわらず神社がその場に存在する意味は体感できるのですが、寺院にはそれを感じることはまれなのです。なぜそうなのかを今まで判明していなかったのですが、「カミとホトケの出会い」について自分の考えに確信が持てるようになってから初めて、神社仏閣を訪問した今回の旅で、それが分りました。神社は自然（カミ）が人をしてその地に鎮座せしめたもの、人がその地の自然を畏れ敬い祀った処。だからその処でなければならない処に、神社は今も在るのです。神社は人ではなく、自然（カミ）が人に作らせたもの。ところが寺院は、人が作ったもの、人がホトケの智慧と対話するために作った場のように思えるのです。ですから、寺院はその所（自然）にあらねばならない必然性はありません。人がホトケの智慧と対話するためには、雨風をしのぐ場所と対話を仮託する対象物（仏像や経文）があれば、それで充分です。そこが「信」の場です。そこでホトケの智慧と対話して、おもむろに「行」へと出向く基点が寺院です。そこが「行」へと出向く場とならなければ、私の「信」を置くことができないのは当たり前のことです。「信なくば行立たず」「行なくば信もまたなし」です。どうやら私は、他者の作った「信」の場から「行」に赴くことができないようなのです。私が「信」を置き「行」に出向く場は、唯一琉游舎であることを確信できたことに、旅は今を再確認することができるものだとも知りました。

告白すると、私が信仰を感得する場所は自然（カミ）を体感するときだけで、寺院に宗教を感得することは殆どありません。どのような名刹に赴いても、文化的な価値のある寺院を訪ねても、例えば本堂に入るまでの、自然の中の佇まいには宗教的な感覚をおぼえることはあっても、きらびやかに荘厳された本堂や、古色蒼然とした仏像に対面すると、ただ、人の意志を感じるだけで宗教的感覚は霧散してしまい、ただ文化財としての建物や仏像を見るだけになってしまいます。そこをある他者が「信」を置いた場所として尊重はしますが、私がそこから「行」に赴こうという場所にはなりません。私がそこでホトケの智慧と対話するには、あまりにも何もないからです。私の法華経も読経の声も心も。あるのは他者がホトケと対話した後の残り香だけです。私は過激なことを述べようとしているのではありません。この実感こそが信仰の本質ではないかと考えるからです。「信」の場には私自身の足下に確固たる私の基盤がなければならないのです。それは寺でも仏像でも、信者でもありません。そこにホトケが在るという確信です。私の場合それは法華経なのです。

私の法華経の在る確固たる基盤は琉游舎です。ここからでしか私の信行は始められないという当たり前の確信をさらに強めることができたのは、カミ（自然）とホトケ（智慧）についての考察の結果であることは言うまでもありません。法華経如来神力品21に「若経巻所住之処（中略）当知是処即是道場（経文があるところはどのような場所でもそこは道場である）」との教えがあります。道場とはホトケの智慧と対話する場所です。ホトケの対話から実践（行）に赴く拠点です。そしてそこからありとあらゆる人と土地、つまり風土に触れること、風土に触れてそれと一体化しようと試み、その風土とともに歩むこと。琉游舎を信行の拠点として、９年を過ぎた今、あらためてここが私の信行の基点と確信するためにも、他者の信行の場を垣間見て、そこが私の場でないことを再確認することも必要だと感じた夏の終わりです。